

資料編

第8-2節 野々市市のすがた

1 地名の由来

白山本宮(白山比咩神社)には、鎌倉時代末期の1312年に記されたとされる古文書が残されています。この古文書「三宮古記」には、水引神人^{みずひきじにん}と呼ばれる人たちが“野市”に住んでいたとの記述があり、これが“野々市”^{ののいち}という地名の最古の文字史料と思われます。また、1486年には、当時の山伏集団の中心的存在であったとされる京都聖護院の道興^{じょうごいんどうこう}という人物が、石動山天平寺を参拝するため野々市を通過した際に、次の和歌を詠んでいます。

風おくる 一村雨に 虹きえて のゝ市人はたちもをやます

虹がかかる空に、風が吹き、にわかに雨が降ってきたにもかかわらず、野々市の人たちは、忙しそうに仕事(立ち回り)を続け止めようとしない

人々が集い“市”で活発な商業活動を行っていた当時の野々市^{ののいち}のぎわいを知ることができます。
野々市^{ののいち}という地名は、約700年前からこの地で使われていた由緒ある地名であることがわかります。

2 位置と地勢

本市は、加賀平野の東部、北緯36度29分、東経136度34分辺りに位置し、総面積は、13.56平方キロメートル、東西4.5キロメートル、南北6.7キロメートルのまちです。

北部から東部にかけては、県庁所在地である金沢市に、西部から南部にかけては白山市に隣接し、肥沃な土地と良質な地下水に恵まれた手取川扇状地にあり、市内の最高海抜は49.6m(新庄地内)となっています。

近年は、旧市街地に加え、土地区画整理事業などによる新市街地が国道沿いや、本市南部、北西部で形成され、市中央部には、行政、経済、文化、交流などの機能が集積しています。

3 歴史と文化芸術

本市には、今から約3,500年前の縄文時代後期から晩期に営まれた国指定史跡御経塚遺跡や白鳳時代末の7世紀後半に建立されたと考えられている国指定史跡末松廃寺跡が残されています。

このことは、はるか原始、古代から人々の生活と開発が進んだ地域であったことを物語っています。

中世に入ると、地元武士団である富樫氏が勢力を強めています。

資料編

1339年、富樫氏は加賀国の守護となり、すでに“市”が形成されていた野々市(現在の住吉町付近)に館を構え、その場所を守護所として加賀国(現在のかほく市から加賀市あたり)の統治を行いました。

加賀一向一揆の支配となる戦国時代前半までの間、野々市は加賀の政治・経済・文化の中心地として栄えました。

旧北国街道が通る本町地区は、江戸時代には宿場町として栄えたところです。

現在でも国指定重要文化財である喜多家住宅や、市指定文化財である旧魚住家(市郷土資料館)、水毛生家といった由緒ある建物が残り、懐かしい街並みを見ることができます。

また、古くから郷土に受け継がれる“じょんから踊り”は、“野々市じょんからまつり”として現在に受け継がれ、ほかにも虫送りや野菜みこし、獅子舞などの伝統行事、市の花木である椿にちなんだ“椿まつり”が開催されています。

伝統的な行事のほかにも、毎年秋にニューヨークから一流のジャズ奏者を迎えるコンサートを行う“BIG APPLE in Nonoichi”には、市内のみならず、日本中からジャズファンが集まるなど、文化芸術活動の盛んなまちです。

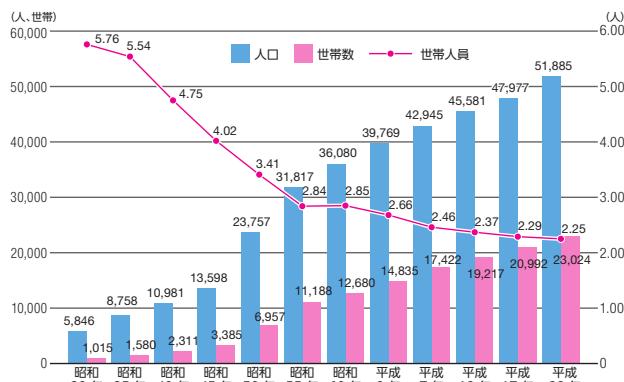
4 人口と世帯

平成22年に行われた国勢調査では、本市の人口は51,885人となりました。

人口については、昭和40年から昭和55年の15年間に約3倍になるなど急速な増加がみられ、世帯数についても23,024世帯を数え、本市の人口と世帯数は、昭和30年以降、増加し続けています。

1世帯当たりの世帯人員については、昭和45年から昭和55年にかけて減少しており、都市化に伴い核家族化が進んだことがうかがえ、その後も、年々世帯人員が減少傾向にあります。

県内他市町や本市と規模が似通った市町に比べて、年齢階層別に人口を見ると、15歳から



64歳までの生産年齢人口が多く、65歳以上の老人人口が少ない傾向にあります。また、0歳から14歳の年少人口のうち、特に10歳から14歳までの人口が少ない傾向にあります。

人口動態の大きな特徴としては、住民異動の激しさが挙げられ、毎年、転入・転出人口がそれぞれ3,000人程度あり、地域コミュニティの維持や形成に大きな影響を与えています。

5 教育

市内には、工業系の金沢工業大学と生物資源環境系の石川県立大学、そして、生涯学習系の放送大学石川学習センターと3校の大学が立地しており、大学の持つ学術研究機能などを生かし、地域産業や生涯学習の振興など、さまざまな連携、協力をを行うことにより、教育はもとより、地域産業の振興が図られています。

3校の大学のほか、幼稚園、小中学校や高等学校が市内にそろっており、学園都市としての色合いも濃く、児童生徒、学生など若者の多いまちでもあります。

6 産業

産業別就業人口の割合は、第1次、第2次産業が減少する一方、第3次産業が増加傾向にあります。

本市の特徴として、石川県中央部の都市圏に位置し、石川中央都市圏には県内人口の約6割が集まっていることから、小売業、サービス業の割合が高く、従業者数と年間商品販売額が、増加傾向を示しています。

農業は、経営耕地面積、農家数、農家人口とともに年々減少傾向にありますが、農林水産業者や団体にとって最高の栄誉とされる“農林水産祭 天皇杯受賞者(農産部門)”を2名輩出するなど都市近郊型農業を推進するまちであり、稲作だけではなく、野菜や果樹、花卉などの特産物を有しています。

市内には、乳製品、工作機械、豆腐製造機械などの製造企業が立地していますが、事業所数、従業者数、製造品出荷額などは近年減少傾向にあります。

土地区画整理事業地内や幹線道路沿道には、食料品、家電、日用品販売などの大型商業施設が集積し、コンビニエンスストアや金融機関などサービス施設が立地しています。また、市内各所には、人気のあるお洒落な飲食店や有名なカレー店、洋菓子店、和菓子店なども立地し、買物に便利なまちとなっています。

資料編

7 生活環境

市域全域が緩やかな勾配を有する平野となっており、土地区画整理事業の積極的な推進により計画的なまちづくりに努め、下水道、公園、道路などが整備された居住地に適した地域として市街地が拡大してきました。

歴史的な家屋が当時の趣を残す旧北国街道では、無電柱化を進めることで、落ち着いた街並みが形成されはじめています。^{註12}

JR北陸本線や北陸鉄道石川線をはじめ、国道8号や157号、金沢外環状道路や県道などの幹線交通網が形成されており、さらにコミュニティバス“のっティ”が市内を運行する交通環境が整備されたまちです。

多くの都市公園があることで、季節の木々や花々が咲き、また、市南西部地域には田園が広がり、水生生物や昆虫が息づいているまちでもあります。

医療機関も多く、ほぼすべての診療科が市内に立地し、高齢者向けのグループホームや高齢者専用賃貸住宅、デイサービスセンターなど、高齢社会に対応する施設も数多く立地しています。保育園や幼稚園、児童館、放課後児童クラブなどには、幼児や児童が集まり、子育てのしやすい環境にあります。

8 地域活動

地域に密着した町内会が活発な活動を行っており、地域コミュニティを形成しています。

また、市内各地では、児童の通学を見守る“見守り隊”が活躍しています。

交通安全協会や災害時に市民が地域における防災力となる自主防災組織など、地域が一体となった活動が行われています。

青少年を地域全体で守り育てる活動も盛んで、ののいちっ子を育てる市民会議による“小学生に携帯電話を持たせない運動”的活動が全国的に評価されています。

さらに、市内の企業などでは、街路の清掃や除雪などを自主的に行う“アグロトプログラム”が活発であり、市民同士がつながるための核となる団体がいくつも育っています。